

槐

かい

岡井省二創刊

平成18年9月号



平成十八年九月一日発行 第百六巻第九号 通巻第二八三号（毎月一回一日発行）
〒420-0801 岡井省二邸 電話054-821-1111

伸
縮

高橋将夫

もう一度盆へと戻す夏の水
さざめきの伝はつてゆく夏木立
手品師の手元で回る走馬灯
阿と生れ畔と死ぬなりかたつむり

「朝日俳句」(八月号)より七句

雲海を渡りて雲の峰を越ゆ
金閣寺炎上苔の花ゆれて
草の上に脱ぎつ放しの蛇の衣
炎ゆる日の伸び縮みする人の列
水底を一度見てから浮いて来い
神仏も妻も信じて端居かな
ルビコンを渡つてからの三尺寝

山 桜

南 一雄

舌の根の乾ける亀の鳴くことよ
山桜阿Qの首が舌を出す
従いてくる八十八夜の家鴨かな
貝の殻積める飯蛸月夜かな
日盛りの匂ひありけり寿命貝
六識のあとさき百足虫押さへける
はんざきや千日行の大腿に
息熱く月下の岩の海牛
とも綱に藻屑のからむ御講凧
びるしやなや腹に縞ある白鯨

特別作品

六道をぎいと廻らす鱧の面
階段に濡れあと涅槃月夜かな
はるかより提灯魚のパリ―祭
地藏盆たつの落とし子眠りをる
夕桜浜の男の桶がゆく
蝮谷月あかあかと渡りけり
おのころの島の砂鳴る親鸞忌
玄室や荒るるばかりの鱧の海
鹿啼いて回峰行の山深し
地下茎の突き抜けてくる夏銀河

槐安集

市場基巳

穂の芽の輝く一日師が恋し
草川の音なく急ぐ灌仏会
初花の朝こそよけれ盗み酒
鶯などやつてられぬと鳴きにけり
春の藻の流れつく辺のなきごとく

水野恒彦

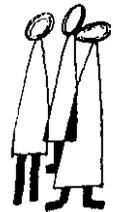
白地着て草の匂ひに近づきぬ
鏡面に軋む音して黒揚羽
生くること不可も可もなし瀧の前
蟬穴を覗きて後生頼みかな
男らにかなしみ動く晩夏かな

延広禎一

太白や烏頭扇の開かるる
雲関や水分越ゆる道をしへ
摩崖佛に木霊弾けし朴の花
桃色のヒマラヤ岩塩夏兆す
魔女凶鑑の表紙まつ赤やパリー祭

加藤みき

日盛の巖の下の水の音
浜宮の幣の金色虻草
蝦蛄食ぶ剥き手なかなか追ひつかず
かきつばた野郎畳に寝ころんで
サイレンとシャンペンとドラ夏の潮



石脇みはる

梔子や鍵屋の鍵のありどころ
鎌首をもたげてゐたる白蛇かな
十葉の花の禁野にゐたりけり
翡翠のいよいよ澄める眼かな
夏藤や杭打つ音のしてゐたる

竹内悦子

生きてゐて松の花より金の粉
蕺菜の雨の光を放ちけり
半夏生首にかけたるアメジスト
立葵竹組んである井戸の蓋
天辺は欠けずにゐたりほととぎす

中島陽華

余花はらり氷砂糖と内儀かな
杉の小枝に頭陀袋ほととぎす
満潮の篝火海の祭かな
高野切書き写しをり虎ヶ雨
水無月の極楽坊の摺佛

栗栖恵通子

荒縄の先ゆれてをり五月闇
青嵐浮かれ比丘尼のつむじかな
かすていらの薄紙ほどの夏おぼろ
肉月の暑き五臓を持ち歩く
うすものの前身あがりにきつね雨

大島翠木

陰神の柱に消えたる夕の虹
まひまひの丸丸ばかり慙愧かな
沙羅の花孔雀の声に歩み寄る
蓮根の穴を囓りし半夏生
思慕のごと蛇池をゆくひかりかな

雨村敏子

泡して何かゐさうな蓴池
はんざきの息する方のほの赫し
太古より水音ありけり螢籠
惑星や梅雨入りの土の匂ひする
犬のうしろゆく空海の木下闇

黒田咲子

朝曇り紋白蝶は羽化する気
足太き金箔大師松葉散る
涼しさのはじめに波の千鳥かな
鯉釣の足場の品字蚊帳吊草
蔓の手にする六月の女竹かな

小形さとる

頬骨が蓬髪が夏始めたり
六月が臍ほそのあたりに来てをりぬ
亡き婆を呼ぶかムラサキアミホコリ
ふふ鳥鳴いて三千大千世界
模糊としてなほ現うつしよ世の皮鯨

本多俊子

深井戸の水の匂ひや蛇莓
煩惱の呼吸してゐる海月かな
笑ひゆきトマトの芽がきしてゐたり
石灼けて揚羽乱舞となりにけり
稲荷みちまつすぐ鯨料理かな

天野きく江

紫陽花のしづく一滴欲つすかも
湖にぐるり葎を活けて寝る
かんがへず太古の地より草を引く
赤鱗や太陽界の水の球
過去未来真ん中なりし青蜥蜴



槐市集

奥村邦子

万緑や時を止めみる石舞台
河鹿笛絵巻を開く僧侶かな
千年の緑滴る金剛杵
雲間より七色の日矢白蓮華
花氷六十階の夕の富士

加藤富美子

十葉の白さ肌には宥されず
ひとむらの草炎えたたす恋蛭
満月の急いでをりぬ熱帯魚
緋牡丹の切られしあとの虚空かな
風立ちて濁世ほのぼの夏椿

片岡静子

早乙女のおどけてみせる水面かな
早苗田を打ち続けをる雨の玉
水無月の広々となる村の内
田植機の音高らかに進み行く
青ぶだう明日がひとつの誕生日

金澤明子

浜の家の解かれてゆきし夏の霧
関鯖の肉厚かりし祭寿司
それぞれのホテルの窓の梅雨満月
黒南風の真中窓拭く命縄
箱庭に夢のかけ橋ありにけり



槐集

高橋将夫選

天水を真つ向に受け透し百合 枚方

中野 京子

いかづちの光呑みたる法の山 枚方

近藤きくえ

鉄線花この座この声変はらざる

メビウスの帯のいづこも明易し

翡翠の水底けつてとびにけり

風薫る南部鉄瓶だきりをり

曼陀羅やけふ花栗の濃き匂ひ

岡崎

岩月優美子

龍神の池に真鯉とあめんぼう 京都

竹中 一花

梅雨闇に姫娑羅の幹赤光り

万緑に吸い込まれゆく行方かな

人去りて滝音いよよ高鳴れり

紫陽花の色の傾れて海と化す

能面に囲まれぬたり心太 枚方

谷村 幸子

海原をトリトン駆ける大南風 岡崎

近藤 喜子

菩提寺や石の露盤とアマリリス

尺蠖にてんごしてをる日和かな

ガンダーラの彫刻に酔ふ五月晴

沙羅一輪手桶に浮かべ迎へらる

河鹿鳴く水ある星に生まれけり

灯取虫タブーに触れてしまひけり

石化せしものの閑けさ墓

リア王の心そのまま五月闇

花さびた光に解けて散りにけり

夕焼や幼なの泪すぐ乾く

音羽瀧ゆれて柄杓の定まらず

琴坂の石の青さよ源信忌

夕焼や幼なの泪すぐ乾く

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」観照

鉄線花この座この声変はらざる 中野 京子
一期一会という。しかし、いつ来てもこの句会は元気でいい
ね。いつまでもそんな槐でありたいものだ。

人去りて滝音いよよ高鳴れり 岩月優美子
静かになって、滝音が高くなったように聞えたのだろう。人が
去ってせいせいしていると滝が言っているようで、面白い。

能面に囲まれぬたり心太 谷村 幸子
能面が掛かっている席で心太を食べている。無表情な貌、見知
らぬ顔に囲まれている不気味さと、心太のギャップに注目。

いかづちの光呑みたる法の山 近藤きくえ
法の山が稲光を吸い込んだと捉えたところが眼目。

音羽瀧ゆれて柄杓の定まらず 竹中 一花
一本に見える瀧の水も、近ずいて柄杓で受けようとすると、けっ
こう不規則に落下している。

海原をトリトン駆ける大南風 近藤 喜子
トリトンは海神。ポセイダンの子。海原の大景である。

天涯の星より氣息夜光虫 南 一雄
天涯の星の氣息を夜光虫が聞く、華嚴・密教的宇宙観の世界。

萍の揺らぎて映る仏頭かな 西村 純太
萍の水面に映る仏頭。よく見たら自分の貌かもしれない。

梅雨しとど濡るるにまかす軒の薪 久保東海司
素朴な景。古典的なよろしさを感ぜさせる一句。

水無月の光回りし京町家 植木 戴子
水無月の京町屋の明るさに、屈折が感じられる。

魂魄のこもれる遺偈西日濃し 近藤 紀子
遺偈とは形見として残す仏教的な漢詩。西日濃しが精神の風景。

三界の流転上手の蝸牛 瀬川 公馨
三界を上手に流転する蝸牛とは、なんともシニカル。

夏の夢捨てては拾ふ虚空かな 大山 里
捨てては拾う。そんな繰り返しの現実がまさに虚空。

龜の子の発心のかほ上げにけり 万城希代子
孫の顔が仏の顔に見えるときがある。親ばかりですね。それとは
もかく、龜の子の発心とはまたけなげ。

冥府とは螢消えゆく淵の上 鈴木勢津子
淵に消える螢火。確かに冥府を思わせる妖しさがある。

一握の砂の熱さよ蟻地獄
熱砂の蟻地獄とは、いかにもこわい一句。 松原 仲子

エレベーターの終点は蟬の穴
エレベーターの終点は蟬の穴で、蟬の穴は冥府に続く。 近藤 公子

キャンパスの池の目高やソクラテス
をとこ阿蘇をんな浅間のめかり時
おさ虫やちりしく薔薇を褥とす
茄子漬くる糠床に聞く協和音
メビウスの環へ那智の滝響きをり
人のため人のためにと梅雨の蝶
とうすみや日蔭に入りて見失なふ
噴水のひと筋ひと輪飛魄かな
悠悠と空渡りをり女郎蜘蛛
中田 禎子
九竜庵 玄
谷岡 尚美
富松 寛子
奥村 邦子
秋岡 朝子
植松美根子
犬塚 芳子
寺田すず江